

サンティアゴ巡礼路の景観をとらえる視点

—経験世界としての景観—

竹中 克行

(愛知県立大学)

- | | |
|-----------------|-------------------|
| I はじめに一巡礼路の景観 | IV 旅人の学び |
| II 地図で辿るランドスケープ | V おわりに—経験世界としての景観 |
| III 歩く人が感受する景観 | |

キーワード：景観，ランドスケープ，間主観性，経験世界，サンティアゴ巡礼路

I はじめに一巡礼路の景観

1. 社会的構築物としての景観

景観は、自然と人間の関係性のうえに立ち現れる土地の姿かたちである。しかし、人間はそのすべてに対して等しく注意を向けるわけではない。目が向くものとそうでないもの、人に見てほしいものとそうでないものを直観的に区別しているからである。この意味で、景観はすぐれて社会的な構築物といえる。

社会的構築物としての景観は、個人の主観の束なり、すなわち間主観性によって支えられている。そのことは、景観政策の実践をみれば容易に理解できる。あらゆる景観政策は、価値判断とは一見無縁の装いを纏っていても、守りたいものや後世に残したいものを選別することで編み出された行動指針である。それが社会に受け入れられるためには、個人のレベルを超えた景観への集約的なまなざしが必要となる。景観政策の実践において市民参加が重視されるのは、科学的方法のみをもって、人々の共有像としての景観を価値づけることが難しいためである (Nogué, 2007)。

景観について論じるさいに、間主観性とならんでもう一つ欠かせないのは、五感の働きを通じて人間のうちに像を結ぶ空間的な実在という視点である。われわれが生きる世界は、宗教的な世界観、近代国家の法規範、地域の慣習など、個としての人間を横に繋ぎ、ときに拘束としても働かさまざまな社会の体系によって満たされている。そうした社会的構築物の多様なあり

方に照らしたとき、歩く、見る、触るなど、人間の空間的行為を介して姿を現す実在という、景観がもつ際立った特性に思いいたる (トゥアン, 1988)。そして、多くの人が空間的行為を共にするとき、そこに共有像としての景観が生まれる。

さて、空間的行為の繰り返しや共有を通じて景観が構築されるプロセスについて、理論的な言辞または仮説として提示するにとどまらず、具体的なフィールドのうえで経験科学的に確認しようとするれば、容易な作業ではない。本研究では、そうした課題の達成をめざして、サンティアゴ巡礼路の調査からアプローチしてみたい。地図上ではよれた紐のようにしか見えない巡礼路は、はたして一つの景観として存立しうるのか。バロック都市のピスタ (通景) のような輪郭明瞭な眺めがないならば、人々が思い浮かべるサンティアゴ巡礼路の景観とは何なのか。そうした疑問から出発することで、巡礼路の景観を切り口として社会的構築物としての景観への理解を深める、という本稿の研究戦略が説得力を帯びてくる。

言うまでもなく、巡礼路は道の一種であるから、本稿の議論は、道の景観一般に拡張できる部分が少なくない。しかし、特定地点から見える視覚的形象として提示しやすい都市の眺望とは異なり、巡礼路の景観にあつては、長距離を移動する人間の行為が伴わないかぎり全体像が明らかにならない。また、巡礼路を利用する人々は、まったくの他人どうしであっても、聖地への旅という共通の動機づけで結ばれている。これらのことをふまえれば、間主観的に構築される景観とい

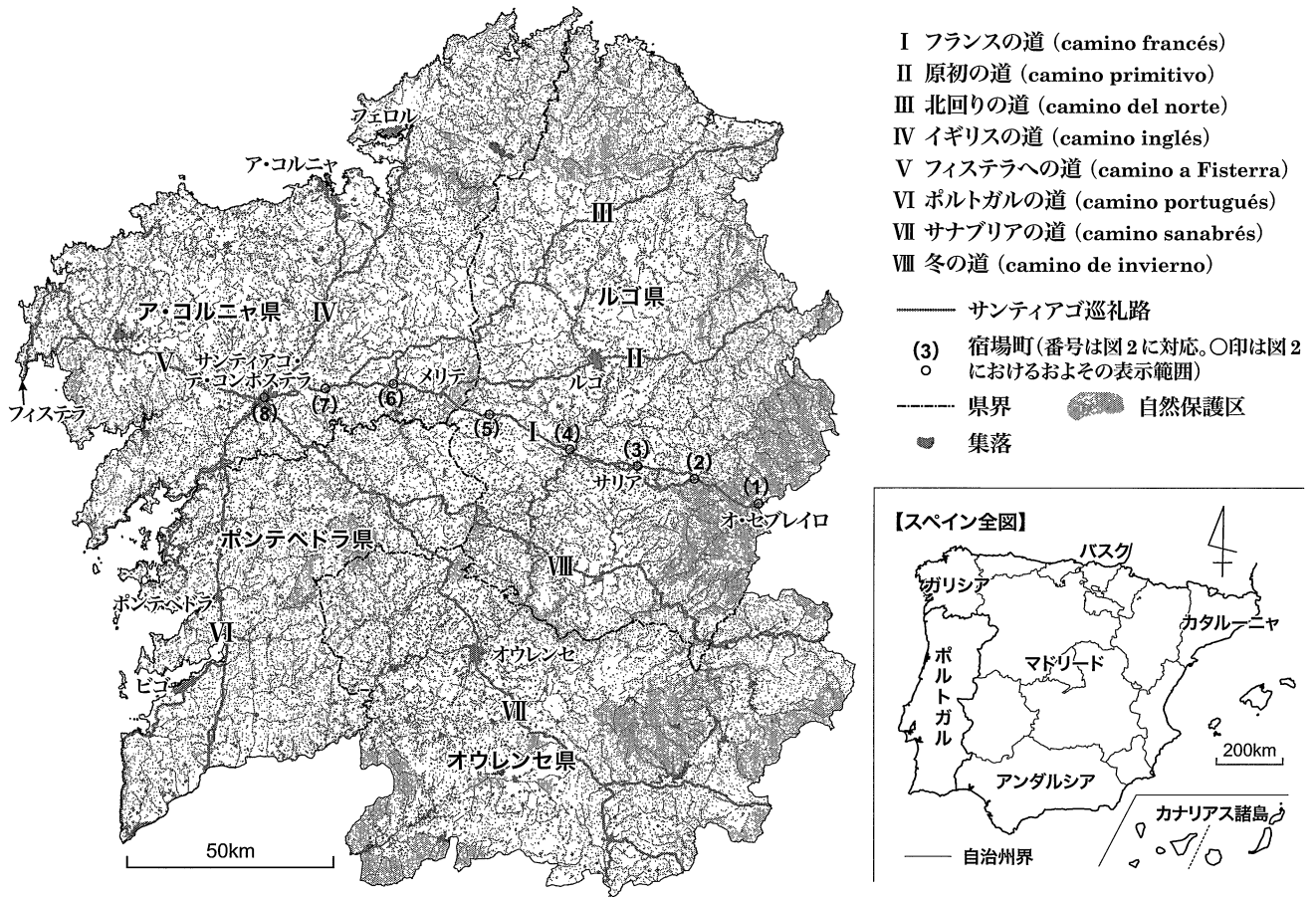


図1 ガリシア自治州におけるサンティアゴ巡礼路の概況

(注)等高線は100m間隔。小規模集落が無数の点のように自治州全域に散在している。見やすくするために、集落の大きさを多少誇張してある。
 (資料)スペイン地理院 (Instituto Geográfico Nacional) のGISデータにもとづいて作成。

う本研究の問題関心にとって、巡礼路が格好の考察対象となることが理解されよう。

なお、地理学をはじめ、環境学、都市・農村計画学、造園学などの分野では、景観とともにランドスケープや風景の概念を用いることがある。本稿では、人間の五感がとらえる土地の姿かたちの意味で、主に景観の語を使っている。しかし、地図データをもとにした土地利用の分析については、日本語の景観では違和感が大きいので、ランドスケープの語を充てることにした³⁾。

2. サンティアゴ巡礼路の調査

本研究では、先述の目的を達成すべく、次の3つの調査・分析に取り組んだ。第一に、スペイン地理院 (Instituto Geográfico Nacional = IGN) のGISデータを活用して、サンティアゴ巡礼路のランドスケープ分析を行った。これにより、巡礼路に沿った景観の移り変わりの基礎をなす、土地被覆の実態が明らかになる。第二に、旅人が実際にふれる景観をとらえるために、巡礼路の短い区間を事例に取って現地調査を行っ

た。フィールド調査では、巡礼路沿いの景観の観察・記録と併せて、巡礼者と接する機会が多い地元住民・事業者に対して、簡易なインタビューを試みた。現地調査は、筆者を代表者として、愛知県立大学および金沢大学の学部生計9名の参加により実施した⁴⁾。そして第三に、旅人が巡礼路の景観に対してもつイメージに接近すべく、参加学生に被験者になってもらい、学生が執筆したコメント・感想をもとづく考察を行った。

サンティアゴ巡礼路は、合計で数千kmにも及ぶ多くのルートを有する道であり、調査・分析を行うさいには、対象区間をある程度絞り込むことが不可欠となる。本研究では、巡礼の終着点サンティアゴ・デ・コンポステラ (以下、「サンティアゴ」と略す) が位置するスペインのガリシア自治州を大枠の研究対象とし、サンティアゴ巡礼路の最も有名なルートにあたる「フランスの道」を取り上げて、GISによるランドスケープ分析を行った (図1)。「フランスの道」は、1993年に世界遺産登録されたスペイン国内のサンティアゴ巡礼路のなかでも、中核的な存在である。

現地調査については、「フランスの道」のうち、ト

リアカステラ村を起点とする約2kmの区間に絞って実施した⁹⁾。トリアカステラ村は、ガリシア自治州の東部山岳から丘陵地へと地勢が変化するエリアに位置し、数十世帯未満の小村 (aldea) と牧畜を核にした小規模農業というガリシア農村の特徴 (Piñeira Mantiñán e Santos Solla, 2011) をよくとどめている。フィールド調査は、サンティアゴ・デ・コンポステラ大学で環境学を講じるエミリオ・カラル (Emilio Carral) 准教授の協力を得て、2017年3月10日金曜日に丸一日の日程で行った。

II 地図で辿るランドスケープ

1. 継起する景観をとらえる視点

巡礼路のように長距離にわたるルートの景観をとらえるには、特定の視点場からの眺めのみならず、移動する人によって感受され、記憶のうちに蓄積される土地の姿かたちという視点をもつことが重要である。そうした継起性は、天空から見るランドスケープと人間が直接ふれることのできる景観、という2つの面から把握可能である。本研究では、GISを使った地図データの分析から前者、フィールドで得た写真データやインタビューなどから後者にアプローチし、両者を組み合わせることで、上述の継起性に対する立体的な理解を得ることをめざした。

GISデータによる地図分析では、IGNの「スペイン土地被覆情報システム (Sistema de Información de Ocupación del Suelo en España = SIOSE)」が提供する土地被覆データを主要な資料とした。SIOSEは、欧州環境機関が1980年代末から継続しているCorine Land Coverプロジェクトをモデルにスペイン政府が独自に立ち上げた事業であり、スペイン全国を対象エリアとしている。初回は2005年版で、現在までに3回のデータ更新が行われている。本研究では、最新の2014年版のデータをスペイン地理院のデータ公開用Webサイト⁶⁾からダウンロードし、分析に使用した。

SIOSEにおいては、分析単位をなすポリゴンを予め定義された土地被覆の種類によって類別するのではなく、個々のポリゴンについて、土地利用の種類・組合せ・比率によって土地被覆の実態を記述するという、独特のデータ構築方法を採用している。ポリゴンの境界は、土地被覆の大きな変り目に沿って設定されているが、均質的な性格づけのポリゴンはほとんどない。このため、SIOSEのデータを利用するさいに

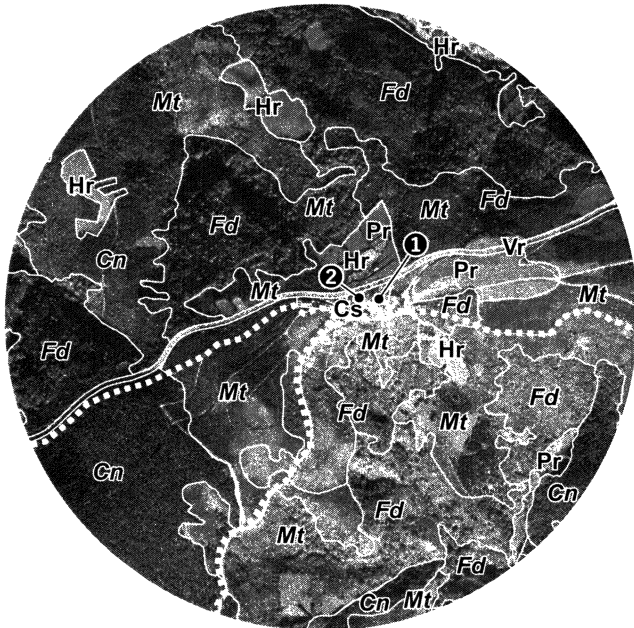
は、ポリゴンごとに土地利用の種類と組合せを示すタグを読み取り、分析目的に応じて必要な情報を抽出する必要がある。しかも、輪郭線の延長が10kmを超える複雑な形状のポリゴンでは、航空写真と照らし合わせながらポリゴン内部の土地利用の分布を読み取るという、やや複雑な作業が求められる。以上のように、SIOSEのデータにはCorine Land Coverと比べて扱いの難しい面があるが、含まれている情報量の多さと肌理細やかさの面で優れているため、景観研究の資料としての有用性は高い。

ガリシア自治州における「フランスの道」は、カステリャ・イ・レオン自治州との境界に近い峠の村、オ・セブレイロに始まり、巡礼の終着点サンティアゴに至る約150kmの道程である⁷⁾。この間に、オ・セブレイロとサンティアゴを含む計8つの宿場町が設定されている。そこで、それら8つを中心とする半径1kmのエリアを分析対象とすることで、巡礼路沿いのランドスケープの特徴とその変化をとらえることにした。

分析にさいしては、SIOSEによる土地被覆データに加えて、ガリシア自治州が2016年に承認した「ガリシア景観カタログ (Catálogo das Paisaxes de Galicia)」⁸⁾、ならびに自治州文化省による文化財一覧を補助的資料として使用した。景観カタログでは、自治州の景観政策の道具立てとなる景観単位 (unidade de paisaxe) を把握した。特産品に関する地理的呼称の圏域設定も、同カタログによって確認している。以上のデータを宿場町ごとに地図化し (次頁図2)、筆者が過去の現地視察で得た情報と併せて分析・考察に付した。

2. 巡礼路のランドスケープ

1番目の宿場町オ・セブレイロは、ガリシア自治州の東部、標高約1300mの峠に位置する村である。厳しい生活条件ゆえ、現在では、200mほど標高が低い自動車道路沿いの新集落に行政・経済の中心が移っている。旧集落にあたる宿場町は、落葉広葉樹林・針葉樹林やマキが繁茂する斜面で囲まれており、農業に関しては、若干の畑地・牧草地をみるのみである。1990年代以降、サンティアゴ巡礼ブームに乗ってアルベルゲ (巡礼者向け簡易宿泊施設) や飲食店・土産物屋が続々と開業したことで、衰退していたオ・セブレイロの旧集落は、巡礼者・観光客に人気の場所へと変貌した。集落内には、9世紀に建立された前ロマネスク様式のサンタ・マリア教会のほか、茅葺きの古民家4棟が保存されており、ともに文化財指定を受けて



(1) オ・セブレイロ (1290m)

景観単位 粗放的農業／森林／マキ

土地被覆 Cs 旧市街, Vr 道路, Hr 草本作物, Pr 牧草地, Fd 落葉広葉樹林, Cn 針葉樹林, Mt マキ

文化遺産 ①サンタ・マリア・ア・レアル・ド・セブレイロ教会 ②オ・セブレイロの茅葺民家群

特産品 セブレイロ・チーズ



(2) トリアカステラ (650m)

景観単位 粗放的農業／森林／マキ・岩場

土地被覆 Cs 旧市街, Vr 道路, Hr 草本作物, Pr 牧草地, Fd 落葉広葉樹林, Mt マキ, Rc 岩場

特産品 セブレイロ・チーズ, ガリシア栗



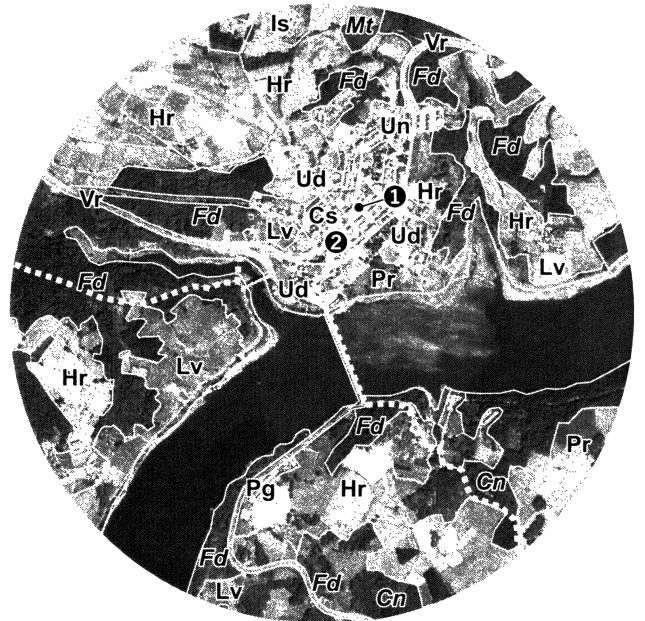
(3) サリア (460m)

景観単位 市街地／周辺市街地／粗放的農業

土地被覆 Cs 旧市街, Ud 非連続市街地, Un 拡張地区, Ed 教育施設, Cm 墓地, Vr 道路, Rf 鉄道, Rv 道路関連インフラ, Hr 草本作物, Pr 牧草地, Fd 落葉広葉樹林, Mt マキ

文化遺産 ①サラリア城址 ②ピラル塔

特産品 ガリシア栗



(4) ポルトマリン (350m)

景観単位 周辺市街地／粗放的農業／集約的農業／農業林地混合／ブドウ畑

土地被覆 Cs 旧市街, Ud 非連続市街地, Un 拡張地区, Is 工場, Pg 農業施設, Vr 道路, Hr 草本作物, Lv ブドウ畑, Pr 牧草地, Fd 落葉広葉樹林, Cn 針葉樹林, Mt マキ

文化遺産 ①サン・ニコラオ・デ・ポルトマリン教会 ②ポルトマリンの町

特産品 DO リベイラ・サクラ, アルスア=ウリョア・チーズ, ガリシア栗

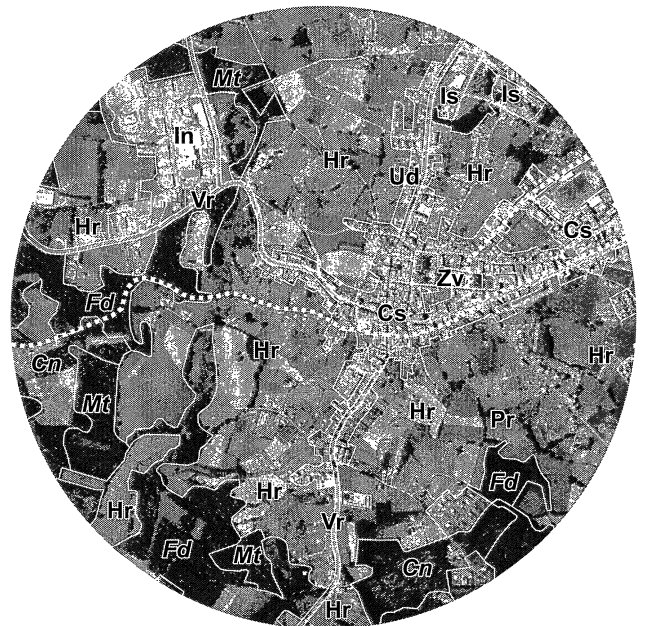
図2 サンティアゴ巡礼路に沿ったランドスケープの変化

(注) 各宿場町を中心付近から半径1kmの範囲を図化した。括弧内は中心地点のおよその標高、白の破線は巡礼路、黄線はポリゴンの境界を示す。
(資料) スペイン土地被覆情報システム (SIOSE) のGISデータ、「ガリシア景観カタログ」、ガリシア自治州文化省の文化財一覧による。



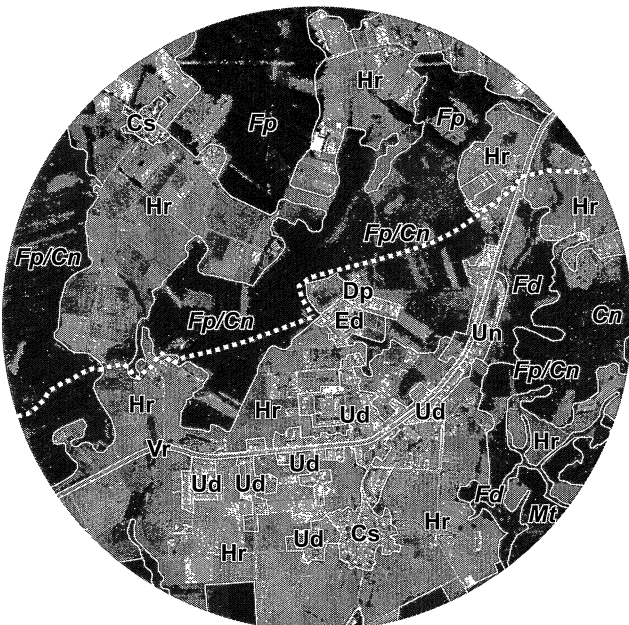
(5) パラス・デ・レイ (550m)

景観単位 周辺市街地／粗放的農業／農業林地混合
土地被覆 Cs旧市街, Ud非連続市街地, Cm商業施設・オフィス, In工業団地, Vr道路, Hr草本作物, Pr牧草地, Fd落葉広葉樹林, Cn針葉樹林, Mtマキ
特産品 アルスア=ウリョア・チーズ, ガリシア栗



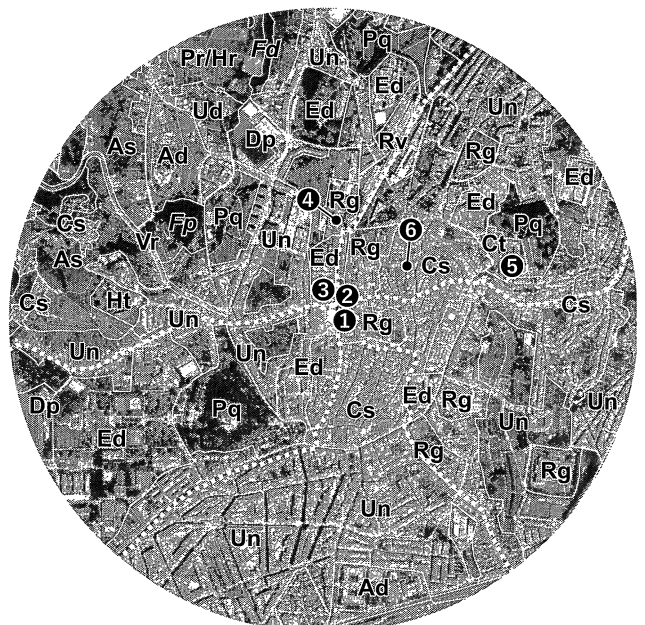
(6) アルスア (380m)

景観単位 周辺市街地／粗放的農業／集約的農業／農業林地混合
土地被覆 Cs旧市街, Ud非連続市街地, In工業団地, Is工場, Vr道路, Hr草本作物, Pr牧草地, Fd落葉広葉樹林, Cn針葉樹林, Mtマキ
特産品 アルスア=ウリョア・チーズ, ガリシア栗



(7) オ・ペドロウソ (290m)

景観単位 周辺市街地／農業林地混合／植林地
土地被覆 Cs旧市街, Ud非連続市街地, Un拡張地区, Ed教育施設, Dpスポーツ施設, Vr道路, Hr草本作物, Fp常緑広葉樹林, Fd落葉広葉樹林, Cn針葉樹林, Mtマキ
特産品 アルスア=ウリョア・チーズ



(8) サンティアゴ・デ・コンポステラ (250m)

景観単位 歴史地区／市街地／周辺市街地
土地被覆 Cs旧市街, Ud非連続市街地, Un拡張地区, As農業居住集落, Rg宗教施設, Ed教育施設, Ad行政機関, Dpスポーツ施設, Ht宿泊施設, Pq公園, Vr道路, Rv道路関連インフラ, Hr草本作物, Pr牧草地, Fp常緑広葉樹林
文化遺産 ①サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂 ②シェルミレス大司教館 ③サンティアゴ・デ・コンポステラ王立病院 ④サン・フランシスコ教会 ⑤サン・ドミンゴス・デ・ボナバル教会 ⑥サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼博

∠ 物館 (番外) サンティアゴ・デ・コンポステラ歴史地区

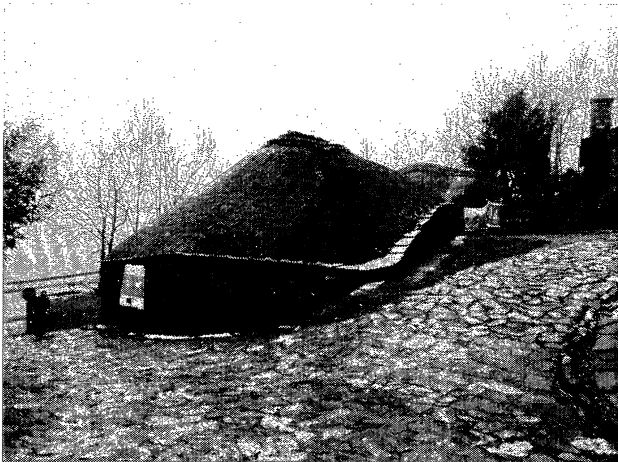


写真1 オ・セブレイロの茅葺古民家

集落内では、写真に写っているものを含めて、同様の古民家を4棟確認することができた。2017年3月竹中撮影。

いる(写真1)。現在では、観光化の進展とともに新築・改築される家屋が増えているが、高所に成立した巡礼の村としての景観的まとまりを維持するために、伝統に従ったスレート造りを採用することが多い。ガリシア東部山岳の特産品、セブレイロ・チーズの原産地呼称を管理する統制委員会は、この村の新集落に置かれている。

2番目の宿場町トリアカステラは、標高約650mの中山間地域に位置する。集落の近傍をシル川の支流をなす溪流が通っており、それを軸として一帯の土地利用が組織されている。トリアカステラでは、山岳部のオ・セブレイロに比べて農地の占める割合が高く、段丘面や丘陵地に畑地・牧草地が広がっている。この地域を含め、ガリシア内陸部に広く分布する落葉広葉樹にクリの木があり、果実は「ガリシア栗」として保護地理的呼称(Indicación Geográfica Protegida)の認定を受けている。トリアカステラの景観については、Ⅲ節で詳しく検討する。

3番目の宿場町サリアは、人口約13,300人(2016年)で、8つの宿場町のなかではサンティアゴに次いで規模が大きい。この町を起点としてサンティアゴまでの100km余りを歩く巡礼者が少なくない。自治州の景観カタログが定める景観大地域(grandes áreas paisaxísticas)では、オ・セブレイロからトリアカステラまでが「東部山地」、サリアは「ルゴ平原」に位置づけられる。実際、平原らしく、緩やかな丘陵地に展開する畑地が存在感を放っている。市街地の内部に注目すると、旧市街の外側を近現代の拡張地区や小規模開発地(図中では「非連続市街地」)が取り囲んでいる。巡礼路の傍らには、文化財指定を受けた15世紀のサリア城址がある。高さ15mほどの見張塔は、

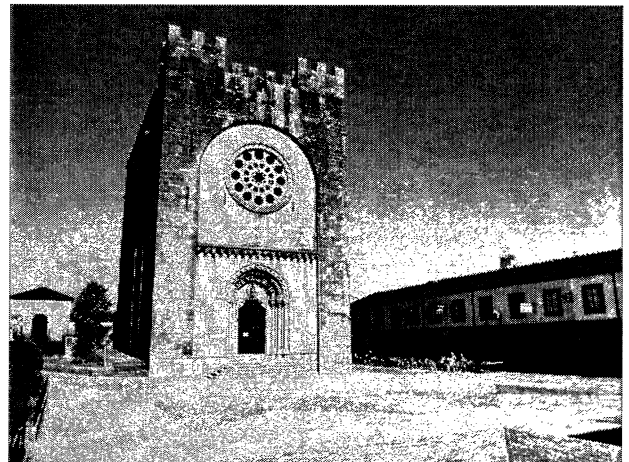


写真2 サン・ニコラオ・デ・ポルトマリ教会

起源は12～13世紀。パレサル・ダムの建設に先立って、丘上の新計画市街地の中心広場に移築された。2013年9月竹中撮影。

花崗岩の組積造りであり、東部山地でスレート造りの民家に見慣れた旅人の目には、やや新鮮に映るかもしれない。景観カタログの総論では、ガリシア中部・東部の広い範囲が地質的に変成岩で覆われる一方、サリアの付近一帯に花崗岩が分布することを示している(Xunta de Galicia, 2016: 39)。中部・東部の変成岩の多くはスレートではないかと推測される。

サリアの後、巡礼路はシル川の河谷を下って、4番目の宿場町ポルトマリに至る。景観カタログの景観大地域では、「ミニョ／シル川河畔」に位置づけられる。ランドスケープの大きな変化としては、ブドウ畑をはじめとする集約的農業の出現が注目される。ポルトマリは、ガリシア自治州におけるワインの原産地呼称の一つ、DOリベイラ・サクラの生産地域内に位置し、シル川の河畔や段丘上に多くのブドウ畑が見出される。他方、現在のポルトマリンの町は、1962年のパレサル・ダム建設による水没補償を受けて、シル川河畔から西岸の丘上に移転したものである。旧市街とその中に建つロマネスク様式のサン・ニコラオ教会(写真2)は、移転前の1930～1940年代に文化財指定を受けている。この指定は現在も有効であるが、元の集落はダム湖に水没しており、渇水時に集落跡が姿を現す(写真3)。

ポルトマリを過ぎると、巡礼路は再び登りに転じ、標高約730mのなだらかな峠を越えて、ウリャ川の流域に入る。5番目の宿場町パラス・デ・レイから先は、景観カタログの景観大地域「中央ガリシア」に位置づけられる。土地利用の概況は、市街地の規模を別にすれば、2つ手前のサリアに類似しており、山間部では見かけない工場や各種施設の飛び地が市街地縁辺部に散見される。また、農地に占める牧草地の比率が高く、



写真3 ミニョ川とポルトマリソ旧集落跡
ふだんはバセサル・ダム湖の下に沈んでいる集落跡が渇水時に姿を現す。段丘上にブドウ畑が見える。2013年9月竹中撮影。

代表的なガリシア・チーズの原産地呼称、アルスア＝ウリョアの生産地域に入ったことが実感される。

サンティアゴまで40km足らずの平原に6番目の宿場町アルスアが位置する。従来、ガリシア農村の範型とされてきたのは、点在する小村の周りに樹木列によって画された小規模な畑地・牧草地が広がる景観である(Cabo, 1987)。これは、フランス地理学でいうボカージュ(bocage)にあたる。現在のガリシアでは、伝統的なボカージュの景観が山間部を中心に維持される一方で、土地生産性を向上させるために、樹木列を取り払った農地も増えている。ここアルスアで旅人が目にするのは、後者の見通しを遮るものが少ない開放的な農地の姿である。他方、アルスアの市街地は、サンティアゴ巡礼路の一部をなす街道を軸線として発達し、街路村的な性格を示している。アルスア＝ウリョア・チーズの中心をなすこの町で1975年以来、アルスア・チーズ祭が毎年3月の最初の週末に開催されている。

7番目の宿場町オ・ペドロウソまで来ると、ランドスケープはさらに大きく変化する。オ・ペドロウソは、13もの教区を有するオ・ピノという基礎自治体の中心集落にあたる。しかし、集落内でも、歴史的な中心にあたる旧市街はやや孤立した位置に退き、町役場をはじめとする主要な集落機能は、国道沿いに開発された非連続的な市街地の方へ移っている。空間的なまとまりを失った市街地とともに、もう一つ注目すべきは、広範な植林地の存在である。その多くは常緑広葉樹のユーカリで占められている(写真4)。外来種のユーカリが19世紀半ばにガリシアにもたらされたことは、現地では広く知られている。その後、パルプ生産を主目的とするユーカリの植林がガリシアの沿岸部を中心



写真4 ガリシアにおけるユーカリの植林地
ガリシアの大西洋岸寄りには、ユーカリの植林地が広範にみられる。(資料) Peritos Melide (メリデの農業技術支援企業) による。

に拡大し、現在では50万haを超えるとされる。ユーカリの植林に対しては、在来種の生態系に多大な影響を与え、森林火災の発生を助長しているという批判が専門家・環境団体などからたびたび提起されてきた。しかし、生長の早さがもたらす高い生産性ゆえに、植林に歯止めがかかっていないのが現状である。アルスア以前の宿場町でも、ユーカリの小規模な林地は存在するが、オ・ペドロウソへ来て、大規模な植林とそれが景観に与えるインパクトの大きさに気づく。他方、農地に目を向けると、方形に区画整理された畑地・牧草地が広がっている。ボカージュを排するのみならず、農地の交換分合によって生産の効率性を高めた農業の姿がそこにある。

巡礼の終着点サンティアゴは、サンティアゴ大司教区を中心にして、ガリシア自治州の州都でもある。9.6万人(2016年)という人口規模は、自治州内の2大商工業都市、ア・コルニャとビゴには及ばないが、通勤・通学人口や巡礼者・観光客といった交流人口の存在が、常住人口をはるかに上回るサンティアゴの影響力を物語る(竹中, 2013)。そうした交流都市としてのサンティアゴの性格は、宗教施設、行政機関、大学、観光施設など、都市の多面的な中心性を支える施設が蝟集する町並みとして、都市景観にはっきり表れている。終着点に到達した旅人は、オブラドイロ広場に屹立する大聖堂の威容とともに、巡礼路に先立って1985年に世界遺産に登録されたサンティアゴ歴史地区の重厚な建造環境に浸ることができる。他方、歴史地区の周りでは、各方面から集まる巡礼路を軸として街路村的な市街地が形成された。サンティアゴの都市計画は、それら紐状の集落の合間に多くの緑地・公園を配置することで、歴史地区から多方向に街路村が延

びる特徴的な空間構造を保っている。石造建築を中心とする人工的環境と緑の空間との接合は、サンティアゴのランドスケープが有する一つの大きな特徴と言えるだろう。

土地被覆データを基礎とする以上の記述からわかるように、巡礼路の旅人は、小村とボカージュ、畑地と牧草地がおりなすモザイクといったガリシアに通底するランドスケープの特徴にふれるだけでなく、その多様性と変化を目の当たりにすることができる。長い道程を歩く人の前に展開するのは、展望台からの見晴らしというより、屏風をたぐるようにゆっくりと継起する景観のパノラマである。そこには、山岳部と平原・河谷といった自然条件に対応する多様性だけでなく、近代化・都市化の圧力に対して異なったレスポンスを示す地域の動態が表出している。

III 歩く人が感受する景観

1. 巡礼路のフィールド調査

徒歩による巡礼路の景観調査は、地図データではとらえがたい旅人の身体的な経験に近づくこと目的とした。実施にあたっては、景観を感受する人間の能力は視覚に限らないことを前提として、触覚（例：溪流の水に触れる）、聴覚（例：小鳥のさえずりを聴く）、嗅覚（例：臭いから家畜の存在に気づく）、味覚（例：アルベルゲの食事を楽しむ）を動員する活動を盛り込んだ。

フィールド調査の対象としたのは、II節で説明した2番目の宿場町、トリアカステラ村の中心集落を出発地とし、同じ村のア・バルサ集落に至る約2kmの区間である。往路は、随所で立ち止まって、カルル准教授から植生、農業・水利、民家などに関する説明を受けながら、約3時間かけてア・バルサ集落まで移動した。復路は、往路で発見・理解したことを再確認しながら、写真撮影に重点を置いて約1時間でトリアカステラ村の中心集落まで戻った。この過程で、地元の住民・事業者合わせて2名へのインタビューを試みた。なお、トリアカステラから次の宿場町にあたるサリアまでは、巡礼路が2つのルートに分かれる（前掲図1参照）。今回は、距離がやや短く、より多くの巡礼者が利用するサン・シル経由のルートを調査対象とした。

現代の巡礼者の圧倒的多数は、往路を歩き、終着点のサンティアゴに着いた後は、飛行機などの高速交通手段で帰路についている。巡礼路上で往路と復路を歩く人が行き会う前近代の巡礼とは異なる、いわば一

方通行の旅である。フィールド調査では、対象区間を往復する方法をとったが、写真については、往路を歩く人の視界を考慮して撮影地点・角度を工夫した。写真撮影には、筆者とともに学生全員が参加し、各写真について、携帯GPSで計測した正確な撮影地点のデータとともに、現地観察に関するコメントを書き留めた。以下で使用する画像は、1点を除いて筆者が随時撮影した写真から抽出したが、写真の選定にさいしては、サンティアゴ巡礼路を初体験した学生の撮影記録をよりどころとした。以下、選定した8地点10点の写真を基礎データとして、歩く人が感受する巡礼路の景観について、すでに論じた継起性の観点から検討する（図2）。

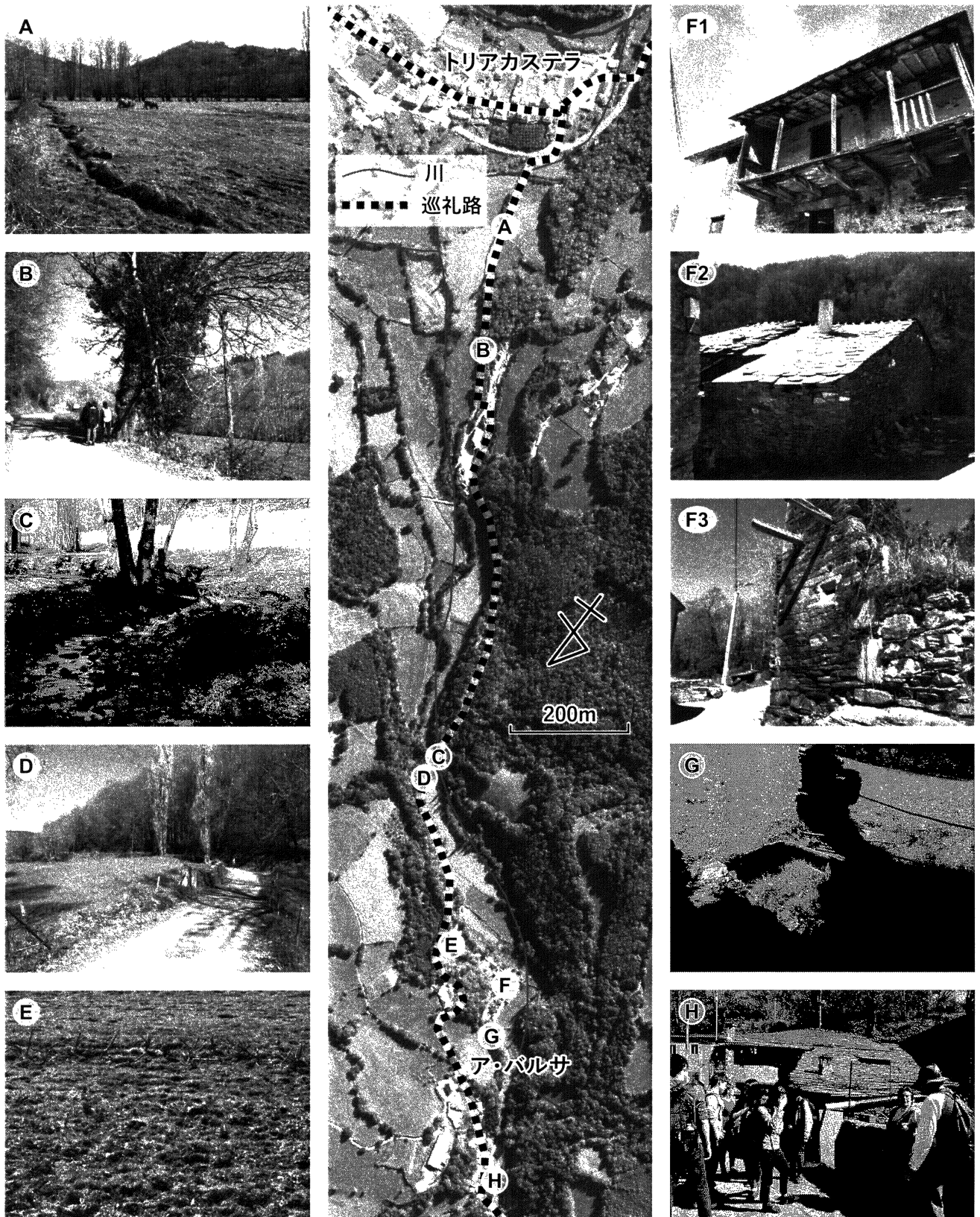
2. 巡礼路に継起する景観

トリアカステラ村の中心集落で「フランスの道」は二手に分かれる。サン・シル経由のルートは、県道から北へ逸れて、幅員4mほどの小道を進む。最初はアスファルト舗装であるが、後述するように、途中で路面のデザインが変わる。

小道に入ると、東側（図2では左側）に牧草地が広がり、赤みがかった小麦色の毛皮を纏ったガリシア・ブロンド種（*raza rubia gallega*）の牛が数頭放牧されていた【地点A】。背後には、ヨーロッパハンノキ（*aliso*）の木立が見える。湿地に育つ樹種であることから、水流に沿った群落の存在が伺われ、実際、しばらく歩くと溪流に行き当たった。トリアカステラが位置するルゴ県は、ガリシア自治州内でも牧畜への特化が著しく、時折、ガリシア・ブロンド種やホルスタイン種の群れを見かける。農地の境界に樹木を植えるボカージュが景観の大きな特徴をなしているが、石材を埋めたり、枯れ木を生垣のように積んで境界を示している場所もあった。道路際などには、家畜の逸脱を防ぐための電気柵が設けられている。

道すがら目にする樹木のなかで、多くの旅人の印象に残ると思われるのがクリ（*castaño*）の大木である【地点B】。スペインでは、クリの木は古代ローマ人がもたらしたと言われ、木材は建材、果実は食用として重宝されてきた。先にふれた特産品「ガリシア栗」の商業的価値を高めるために、マロン・グラッセが商品化されている。クリの木はまた、数百年に及ぶ寿命と逞しい樹形ゆえに、高い鑑賞的価値を有する。筆者らが遭遇した木も、樹齢数百年の古木と推定され、幹の周りに別種のクリの木が寄生していた。

出発点から1km余り歩いたところで、小さな橋で



A: 牧場に放たれた牛 **B:** 巡礼路の傍らに立つ栗の大木 **C:** 溪流に設けられた小さな堰 **D:** デザインされた巡礼路 **E:** 蔬菜の露地栽培 **F1:** 廃屋化した農家 **F2:** 総スレート造りの家屋 **F3:** 廃墟に掛かる道しるべ **G:** かつての共同洗濯場 **H:** ア・バルサ集落の民家

図2 歩く人から見たサンティアゴ巡礼路の景観

(注)トリアカステラ村(ルゴ県)の中心集落からア・バルサ集落までの約2kmの区間を対象として、歩く人の視界に入る景観要素を自然と人間の関係性に力点を置いて記録した。地点Fのみ、ほぼ同一地点から撮影した3点の写真を組み合わせた。2017年3月10日竹中撮影(F1のみ森島更が撮影)。

せせらぎを渡った。橋の袂から水際に下りて観察すると、溪流に小さな木製の堰が設けられていた【地点 C】。すでに朽ちかけていたが、水を分流させて農地へ導く仕組みであることが理解できた。後で地図を確認すると、溪流はア・バルサ水路（Rego da Balsa）と表示されており、成り立ちは自然の河川であるが、利水システムと一体化した存在であることが伺われる。ガリシアは、スペインでは最も雨の多い地域であるが¹⁰⁾、厚みのない酸性土壌は保水力に乏しい。このため、蔬菜の栽培や牧草地の維持のために、灌漑設備が必要とされる。

橋を渡った辺りで、路面が単純なアスファルトから砂利粒が目立つ舗装へと変わった【地点 D】。道の中央をよく見ると、垂直に立てたスレート板を道の方向に対して直角に埋め、それを進行方向に隙間なく連続させることで道の軸線を出すデザインになっている。経年劣化の度合いから判断するに、さほど古い舗装とは思えず、巡礼路の雰囲気づくりをねらった路面デザインと推測された。正面の沿道左側に立つ高木はポプラ（chopo）であり、同種の立木が調査区間を通じて散見された。

さらに歩を進めると、露地栽培の畑地の傍らを通る場面があり、GIS データでは判別困難な作目が判明した【地点 E】。収穫された後、株のみわずかに露出している手前の畑がグレロ（grelo）、その奥で茎を残して葉が摘み取られているのがベルサ（berza）である。ともに、ガリシア風スープ（caldo gallego）や郷土料理の煮物で馴染みの野菜であり、アルベルゲの食事にも頻出する。食用としては葉菜類に位置づけられるが、グレロが根菜であるのに対して、ベルサは長い茎の上に実がなるキャベツの一種である。根や茎は飼料として利用される。

巡礼路の通常ルートをわずかに逸れて、川沿いの畑を見ながら歩くうちに、ア・バルサ集落の最初の小村に差し掛かった【地点 F】。この小村は、廃墟を含めても 10 棟に満たないほど小規模である。村落に入っただけで右側は、空き家化して相当の年数が経過したと思われる 2 階建ての民家である【F1】。1 階部分が厩舎とされ、主たる居住空間にあたる 2 階には、物干台の役割を果たす大きなバルコニーが設けられている¹¹⁾。壁はスレート積みで、石材の上に施された白い塗装が剥離しかけていた。梁にはクリなどの木材、屋根葺きにはスレートを使い、入口両脇の柱は石材を充てて強度を高めている。いずれも、この地域では一般的な建築方法である。ガリシアの伝統的民家では、1

階に牛を入れることで、寒さが身に凍みる冬場に暖気を得たという説明を各所で耳にした。

民家の壁を観察すると、厚さ 3 ～ 10cm 程度のスレート板を積み上げ、隙間を粘土で固めている。これが多雨の気候条件に合った伝統的な工法なのであろう。分厚い石の壁は断熱性能が高く、夏涼しく、冬暖かい屋内空間をつくる。しかし、近年はコンクリートの使用が増えており、この小村でも、スレート板をコンクリートで固定した家屋があった。屋根を葺くスレート板も、以前はすべて職人の手で整形したが、最近になって葺き替えられた屋根は、機械整形の材料を使っている。先述の空き家の向かい側にある民家の屋根を見ると、屋根の真ん中辺りを境に、手仕事によるごつごつした石材と機械で薄くスライスしたスレートの両方を確認することができた【F2】。

完全に廃屋化し、屋根が崩れ落ちた家屋もある【F3】。上部がなく、鳥の巣のようになった廃屋に、巡礼の終着点サンティアゴの方向を示す標識だけが色鮮やかに掲げられていた。現在のガリシア農村部ではなんら珍しくない状況である。そうした景観を目にした旅人のなかに、遺棄されたものの侘しさとでもいふべき感覚をもつ者も少なくないであろう。

小村の外れまで進むと、共同洗濯場の跡があった【地点 G】。形状から洗濯場と判断されるが、家電の普及により不要となったのち、一時期、家畜の水飲み場として使われた可能性がある。スペインの他地域と同様、かつての共同洗濯場は女性の社交場として機能していたに違いない。

ア・バルサの中心をなす小村に着いた。斜面をつづら折りに上る道沿いに家屋が建っているため、全部数えたわけではないが、合わせて十数棟であろうか。巡礼路に沿って集落の一番奥まで進むと、低い屋根の上に煙突が立っている建物を見かけた【地点 H】。これは間違いなくパン焼き窯であろうと思っていた矢先、母屋の 2 階から主婦のアリシアが顔を覗かせた。アリシアは、筆者らのリクエストに応じて、今は使われなくなった窯の内部や母屋との間にある牛舎を見せてくれた。牛舎は、家畜の糞尿を床下に集めて厩肥にする仕組みになっていたが、窯と同様、すでに使用していないとのことであった。

以上のように、巡礼路を自分の足で歩くことで、景観のディテールを味わえるだけでなく、地図上に表れる土地利用のモザイクが実際の生活のなかでいかに結び合っているかがみえてくる。牛が草を食む牧場、グレロやベルサが瑞々しい葉をつける畑、溪流から分流

させた水路，1階を厩舎にしたスレート造りの民家，共同洗濯場の跡といった景観要素は，道を歩く人の記憶のなかで互に関連づけられることによって，地域の空間文化として明確なイメージを結ぶことだろう。

3. 地元の人々の語り

巡礼路の旅人にとって大きな楽しみの一つに，出会った人々との会話がある。巡礼者は，「よい旅を！（¡Buen camino!）」と声を掛け合い，タイミングが良ければ，初対面の打ち解けた会話が始まる。巡礼路を舞台とする経験の共有に，旅人の交流を促す働きがあるのだろう。

巡礼者どうしの出会いとともに，旅人が直接接触する機会の多い相手としてアルベルゲの経営者があげられる。サンティアゴ巡礼路では，巡礼者の証明を携帯している旅人に対して1泊10ユーロ以下の宿泊を提供するアルベルゲが多数開設されている。他方，アルベルゲのない集落で野宿したり，途中で病気・怪我などのトラブルに見舞われる巡礼者も少なくない。そういう旅人が支援を求めるさいに，巡礼路沿いの住民との間に予期しない交流が生まれることもある。今回の調査では，地元住民の一人である先述のアリシアに加えて，アルベルゲを経営するアンヘルにインタビューを試みた。以下にその内容を要約する。

アリシアは，72歳という高齢にもかかわらず，澁刺としていて話好きなお婆さんである。サンティアゴ巡礼ブームとともに多くの旅人が家のすぐ横を通って行くようになったことについて，村に活気と交流をもたらしてくれるポジティブな変化と感じていた。旅人との遭遇はまた，自分自身にとっても楽しみの一つだと言う。なかには，挨拶やちょっとした世間話を交わすだけでなく，投宿を望む者もいる。しかし，アリシアの家は，営業許可を得たアルベルゲではないため，万が一の事故を心配して，家の中には人を泊めない。その代わりに，寝具を貸すなどのやり方で巡礼者を手助けすることは珍しくないと言う。アリシアによれば，小村内に今も住んでいるのは5世帯ほどにすぎないが，巡礼者のなかにこの土地の良さに惹かれ，空き家を購入して住み着く人が現れた。実際，筆者らが立ち寄ったア・バルサの最初の小村には，外国人経営のアルベルゲがあり，アリシアの話では，巡礼路で知り合ったオランダ人とイタリア人のカップルが経営者とのことであった。

アンヘルは，トリアカステラ村の中心集落でアルベルゲを経営する壮年男性である。夫婦で巡礼宿とレス

トランを切り盛りしている（次頁写真5）。若い頃は，スイスで馬の世話をしていたが，サンティアゴ巡礼ブームの到来とともに，故郷にビジネスチャンスを感じ取り，開業に至った。レストランの料理では，ガリシア風のスープや胃腸煮込み，串刺し肉のグリル，牛タンの煮物など，郷土色を出す工夫をしている。アンヘル曰く，サンティアゴ巡礼路でも，ハンバーガーやパスタのように，没个性的なメニューしか提供していない店が少なくない。そのため，ガリシアに来て食が変わったと旅人に感じてもらおうと，食材は極力地元の業者から調達するよう努めている。しかし，自治州による食品衛生管理が厳しいため，必ずしも思い通りにはならない。青果物に関しては問題は少ないが，肉製品は食品市場で調達するよう義務づけられていると言う。信用できる農業者がいても，直接調達はできないということである。同様の難しさは，川魚の鱒についても当てはまる。ガリシアの溪流には多くの鱒が生息しており，個人消費用の釣り場も設定されている。しかし，食品衛生管理の観点から商業利用は認められておらず，美味の鱒が近くで釣れるとわかっていても，養殖魚を仕入れざるをえないとアンヘルは説明する。他方，アルベルゲの利用状況について質問したところ，貴重な宿泊者のデータを見せてくれた。大多数は，スペイン国内のほか，フランス，ドイツなど，ヨーロッパの国々からの巡礼者で，日本人も，少数派ながら年間40人ほどが宿泊していた。

IV 旅人の学び

1. 時間軸からみる継起性

サンティアゴ巡礼路の景観は，空間的のみならず，時間的にも継起的な性格を帯びている。歩く途次で見聞する事物や出会った人々とのやりとりを通じて感じたことが，旅人のうちに学びとして積み重なってゆくからである。本研究では，フィールド調査に参加した学生を被験者として，旅する人の学びのプロセスに対する洞察を試みた。

学生は全員，III章で説明した調査に参加しており，その過程で，巡礼路を取り巻く自然や生活文化について協力者のカラル准教授の教示を受けている。頼るべき「ガイド」を得たという意味では，通常の巡礼者やや異なった経験をしたと言えるかもしれない。しかし，旅しながらガイドの説明を受けることは，現在のサンティアゴ巡礼では珍しいことではない。また，旅人の多くは，宗教的な信仰心よりも，自己の克服や個



写真5 巡礼宿のレストラン

サンティアゴ巡礼ブームの到来とともに、宿場町を中心に数多くのアルベルゲが開業した。トリアカステラにて2017年3月竹中撮影。

人としての挑戦心に動かされて巡礼を思い立っている (Lois González y Lopez, 2012)。そうした現代の巡礼者のプロフィールや旅のスタイルを考慮するならば、サンティアゴ巡礼路を初体験した学生の感想は、考察材料として十分な意味をもつと考えられる。

2. 学生による巡礼路の学び

参加学生には、特段の前提条件を置かず、1日の巡礼路体験から得たことについて、自由に感想を述べてもらった (表1)。以下、学生のコメントをいくつかの論点に整理してみたい。

まず、多くの学生に共通するのは、巡礼路の景観について、道や家屋、並木などがつくる視覚的な形象としてではなく、自然環境との関わりから生まれた生活文化としてとらえる視点が強く出ている点である。「カミーノは、人と自然・動物が共存することで生まれた景観であることを強く感じました」「人工的に形成された植生であることを示しているのではないのでしょうか」「自分のなかに巡礼路は自然物であるべき、という思い込みがあった」といったコメントが代表例としてあげられる。

とくに今回のフィールド活動では、短い距離をゆっくりとしたスピードで観察しながら歩いた。このため学生の関心は、生活者の知恵が生み出した自然との共生のディテールに及んでいる。灌漑設備や粉挽き水車 (写真6) などがその典型である。「雨がよく降るガリシアなのに、利水設備が整えられているのが面白い」「夏は風通しが良く、冬は保温が利くと聞き、意外に住みやすそうな家だと感じました」「一見、野生に見える草木も、実は人々によって手入れされています」といった感想は、協力者の説明を手助けとしながら、



写真6 巡礼路沿いに立つ水車小屋

溪流に小規模な堰を設け、得られた落差を利用して粉挽き用の水車を回した。サン・クリストボ・ド・レアルにて2017年3月竹中撮影。

参加者の関心が目の前の景観を生起せしめていている人々の営みの内側へと引き寄せられていく様子を示しているように思われる。学生の一人は、「知れば知るほど疑問も出てきて、自然と、周りのあらゆるものに目が向くようになりました」と述べる。教員とのフィールド活動という場が及ぼす効果を差し引いても、巡礼路の経験が人間の感性や思考に強く働きかけていることを示唆するコメントである。別の学生は、「なかば巡礼者になった気持ちでカミーノを歩いてみると、自分のイメージが大きく覆されました」と言う。巡礼路には歩く人をして舞台の当事者に昇華させる力があると、言っても、あながち過言ではないだろう。

学生の関心は、目の前の景観からさらに一步進んで、道を通じた地域の結びつきや道が地域づくりに果たしてきた役割にも及んでいる。「巡礼路ができたから集落が成立したのか、あるいは村が先にあって巡礼路が形成されたのか」「カミーノは、彼らが生きるためにとっても重要な役割を果たしていると思いました」「実際には、道以外にも多くの事物があることに気づきました」などのコメントには、視覚的形象としての景観が人間のなかに蓄積された知識と結ばれ、かつ、そうした相互作用が新たな記憶となって積もってゆく様子を伺うことができる。

わずか1日のフィールド活動を経ることで、参加学生は、気づかぬうちに旅人の視点で巡礼路をとらえる感覚を身につけたように思われる。そのことは、調査終了後に学生が選んだサンティアゴ巡礼を知るための映像作品の特徴によく表れている (次頁表2)。

学生が注目した作品は2点ある。ドキュメンタリーでは、アメリカ合衆国のアマチュアが自らの巡礼体験をもとに制作し、YouTubeで公開した作品 *Walking*

表1 学生による巡礼路の学び

<p>【大矢美佳】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・巡礼路ができたから集落が成立したのか、あるいは村が先にあって巡礼路が形成されたのか、疑問に感じました。 ・ヨーロッパの山は、日本に比べて樹種が少ないと聞いていました。それでも、よく観察しながら歩くと、わずか2km歩くだけで10種類くらいの樹木を見分けることができました。生活のなかで、各々の木が違った役目を果たしてきたのでしょうか。 ・雨がよく降るガリシアなのに、利水設備が整えられているのが面白いです。土地が痩せていて、保水能力に乏しいためと教わりました。
<p>【絹川ほのか】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ガリシアでは、自然との共生がすばらしいと感じました。たとえば、住居の下に牛を飼って暖をとっていたこと、セメントのない時代に粘土や石、木を使って壁をうまく作っていたこと、各々の樹木の特徴をいかしてモノを作っていたことなどです。昔から自然とともに生活してきたからこそ、話をしてくださったお婆さんのように土地への愛着心がもてるのでしょうか。 ・登山やハイキングが好きなのでよく山に行きますが、植物や土地の使い方をはじめ、山から受ける印象は日本と違います。それぞれの気候の違いなどに興味が湧きました。さまざまなことを知りながら歩くのは、普通に歩くのに比べて何倍も楽しさが増します。知れば知るほど疑問も出てきて、自然と、周りのあらゆるものに目が向くようになりました。
<p>【佐川千遥】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・村の家は薄い石を積み上げて造られていて、その石は少しぶつけると欠けるほど脆いものでした。そのような材料を使おうとしたことに驚くとともに、家の基礎となる部分には大きく硬い石を使っていることに感心しました。夏は風通しが良く、冬は保温が利くと聞き、意外に住みやすそうな家だと感じました。 ・アルベルゲを運営しているオランダとイタリアの方がサンティアゴ巡礼路で出会ったと知り、歩いている時だけの出会いではなく、その後も交流が続いていくのは素敵なことだと思いました。
<p>【柴山莉絵子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カミーノに住む人々は自然や動物たちを有効に利用してきたのでしょうか。コンクリートがなかった時代に建てられた家屋は、薄い石板を重ねて屋根を葺いているために壊れにくいそうです。壁の材料も、夏は遮熱、冬は部屋を暖める役割を果たしていることに感心しました。昔は、2階建ての家の1階で牛を飼い、その熱で部屋を温めていたようです。 ・私たちが訪れたあの小さな村の経済は、巡礼者や観光客で支えられているのでしょうか。カミーノは、彼らが生きるためにとても重要な役割を果たしていると思いました。
<p>【土井柚里奈】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一見、野生にみえる草木も、実は人々によって手入れされています。人々が自然を大事にし、土地の特性をいかしているのでしょうか。そのことが独特の風景をつくっているのだと感じました。昔ながらの暮らしや巡礼路の風景を守ろうとする住民や行政の努力が伺え、それが観光業に結びついているのだと思います。 ・しかし、村の生活は便利ではないので、若者が離れてしまうといいます。この伝統的な暮らしと風景が守られることを願います。
<p>【西貴司】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サンティアゴ巡礼路に対しては、大きく開けた景観と山中を延々と行く道、そして人が手を一切加えていない、農業とは無縁な場所をイメージしていました。しかし、なかば巡礼者になった気持ちでカミーノを歩いてみると、自分のイメージが大きく覆されました。牧場があり、水利もしっかり考えられているとか。それに、住民こそ少数ですが、村々が点在していました。 ・カミーノは、人と自然・動物が共存することで生まれた景観であることを強く感じました。そして景観の持つ奥深さと要素の豊かさを学ぶことができたと思います。
<p>【松下梓】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回歩いたところも川の近くでした。水量が少なくても川が流れているということは、長旅で重要なことのひとつかもしれません。 ・クリやカバノキのように、食品や建材として用いられる有用性の高い植物を多く見かけました。人工的に形成された植生であることを示しているのではないのでしょうか。 ・自然のままとはいったい何だろうかと考えさせられました。世界遺産の地位を守る、観光客に来てもらう、利便性を維持する…といった目的に対して、優先順位を付ける必要があると感じました。どれも大切だからと言っては巡礼路全体での統一ははかれないのではないのでしょうか。
<p>【森島更】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・景観について何も考えずに歩くことも可能かとは思いますが、巡礼路の景観について思いを馳せながら歩くと、よりよい経験ができるのではないかと思います。同時に、巡礼者は景観について何か考えながら歩くものなのかな、と疑問に思いました。 ・巡礼路沿いの村に住むのは不便ではないかと思っていました。しかし、村の方に話を聞き、暮らし方を見て考えが変わりました。ある程度の不便さはあるかもしれないですが、町では得られない「生きやすさ」「心地よさ」があるのだらうと感じます。 ・人の手で植えられた木々や田畑に水を引く水路のように、巡礼路の自然には意外と人の手が加えられているように感じました。逆に言うと、自分のなかに巡礼路は自然物であるべき、という思い込みがあったということです。
<p>【渡邊理久】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一般的なサンティアゴ巡礼路の情報では、道しか写っていないことが多いのですが、実際には、道以外にも多くの事柄があることに気づきました。 ・電気を使って寒さや暑さをしのぐことができなかつた時代に、近くにあるものの性質をいかして生活してきた人々の知恵に感心しました。溪流を堰き止めて水を引く仕組みでは、自然を傷めることなく、自然に上手に手を加えています。加工が容易なスレートはあちらこちらに使われていますが、大きな重みを支えないといけない場所には別の素材をあてがっているようです。

(資料)学生本人が当日に発したコメントおよびフィールド活動が終わった後に執筆した短文にもとづいて、要点をまとめた。

表2 学生が選んだ巡礼路に関する映像作品

<p>映像作品1—ドキュメンタリー</p> <p>【基本データ】作品名：Walking The Camino de Santiago／時間：38分／制作：Dane Ward／公開：2013年</p> <p>【選定理由】このドキュメンタリーでは、フランスの道の出発地から終着点サンティアゴに至る巡礼の様子を知ることができる。制作者は数多くの写真を撮影している。ただたんに巡礼路を撮影した写真に見えても、周りに写り込む木々や地形など、巡礼路を歩いた者には見えにくいランドスケープがあると感じた。また、それを見つけることに面白みがあると思った。アルベルゲに宿泊する様子から、どのように食事や洗濯をして次の日に繋げるのか、イメージを掴むことができる。宿泊する町の教会や市場、暮らしの様子もわかり、巡礼の魅力が伝わってくる。そして何より、私たちが思う巡礼の魅力の一つに、新しい人との関わりがある。このドキュメンタリーでは、文化の違う人々との交流が垣間見える場面が多くあり、大きな魅力になっている。</p>
<p>映像作品2—映画</p> <p>【基本データ】作品名：『サン・ジャックへの道』／時間：112分／監督：コリーヌ・セロー／公開：2005年</p> <p>【選定理由】第一に、巡礼道から見る景色が美しい。快晴のもとで、広大な野原や高所からの見晴らし、砂漠のような風景、木が生い茂る風景などが展開する。人々が暮らす町並みも映っている。そうした自然の景色や町並みは、観る者をして巡礼への欲求を掻き立てる大きな要素になると思う。第二に、さまざまな境遇の巡礼者たちの交流が、現実味をもって人間臭く描かれている。作品には、主人公の3人の兄弟のほか、複雑な家庭事情をもつ案内人、重い病気を抱える女性、2人のアラブ人が登場し、彼らの間に巡礼を通じてふれあいが生まれる。そうした交流によって可能となった人間の成長過程が見事に描き出されている。今の自分を変えたいという気持ちでいる人を巡礼の旅に駆り立てるような作品と言えばよいだろうか。大自然のなかを歩くうちに、自分を省みながら一回り大きくなる登場人物たちの姿は、観る者を魅了するだろう。</p>

(資料)参加学生が執筆した推薦文をもとにまとめた。

The Camino de Santiago が選ばれた。理由としては、巡礼路のランドスケープや巡礼者の体験やかれらが会う住民たちの日常が伝わってくるもののほか、文化を異にする人々の交流が垣間見えることをあげている。直前に行った巡礼路のフィールド活動において、出身国の異なる2人が巡礼路で知り合い、アルベルゲを立ち上げるに至った事例に遭遇したので、そのことが巡礼経験の共有に対する参加学生の関心を高めたのかもしれない。実際、巡礼路の学びに関する先のコメントでも、この点が強く印象に残ったと述べた学生がいる。

映画作品のなかで学生が選んだのは、フランスの映画監督コリーヌ・セローが10年余りに制作した『サン・ジャックへの道』である。原語はフランス語であるが、日本でも字幕付きバージョンが市販されている。この作品で学生がとりわけ注目したのは、巡礼の経験を通じて人間が成長するプロセスである。長い道程を共にする者どうしが人生の悩みを打ち明け、助け合う。親の遺産の相続をねらう兄弟3人が相続の条件とされたサンティアゴ巡礼の旅に出るといった物語の設定は、いささか現実離れしている。しかし、日常の利害を忘れさせる人間どうしの邂逅は、多くの巡礼者が経験していることにちがいない。そうした予想外な出来事が起きることを予期させるところに、学生が感じ取ったサンティアゴ巡礼路の大きな魅力があるのだろう。

V おわりに—経験世界としての景観

本稿では、社会的構築物としての景観の特性を浮き

彫りにすることをねらって、間主観性と空間的な実在の視点から、サンティアゴ巡礼路の景観に関する考察を試みた。その結果、巡礼路という具体的なフィールドに立脚した研究から、理論的な示唆を含む知見が得られたものと考えている。

社会的構築物としての景観のなりたちは、特定の視点場からの眺めという限定的な設定のなかでも、ある程度は理解可能である。たとえば、城郭や大聖堂といった都市を代表するランドマークへの眺望を遮らないよう、周辺の建造物の高さを規制する場合、そこには、城を中心に据えた眺めが有する価値を社会的に合意しようとする意図が働いている。封建社会なら領主の権威によって強制された眺望が、現代社会にあっては、景観デザインの技術や行政的な承認といった手続きによって正当化される。しかし、この方法によって価値づけできる景観は、何らかのスペクタクル性を有する眺めであって、大部分を占める「普通」の景観には当てはまりにくい。ランドマークの代わりに街路の軸線に沿ったビスタといった別の種類の眺めを提示したとしても、事情は変わらない。

巡礼路の景観は、自然と人間の関係性に裏打ちされた土地の姿かたちという、地理学の原初的な関心へとわれわれを立ち返らせてくれる。GISデータとフィールド調査を併用した本稿の分析から明らかになったように、サンティアゴ巡礼路が景観としてのまとまりをなすのは、道の両側に2隻立ての屏風のごとく連なる景観がもつ継起性ゆえである¹²⁾。ある地点から見るだけでは個性が掴みにくい景観であっても、そこに連続性と変化が伴うことで、土地と関わり合いながら

生きる人間の物語を宿していることが理解される。自然環境、農業・水利、集落・建築といったさまざまな景観要素は、道を歩く人の五感によって感受され、記憶のなかで互いに結ばれることによって、地域の空間文化として明確な意味を与えられるのである。

道に沿った景観の移り変わりという空間的な継起性は、さらに歩く人の経験を介して記憶のなかに蓄積されることで、時間的な継起性へと翻訳されてゆく。学生による巡礼路の学びでは、自然環境との関わりから生まれた生活文化とともに、巡礼という行為をきっかけに生まれる旅人どうし、あるいは旅人と地元住民の繋がりへの関心が強く表れていた。しかも、一見異質と思われる両方の視点が、参加学生の言葉のなかでは易々と結ばれ、一体のものとして語られる。筆者は、そうしたコメントは学生だから発せられたのではなく、景観分析の専門家ではない普通の市民に共通の感覚を露見させるものだとして推察している。

視覚的形象という狭い視野から景観をとらえるとき、われわれの関心は、舞台装置としての自然環境や建造環境に矮小化されがちである。しかし、人間の営みとそれを支える舞台装置は、本来、相互交渉的な関係にあるはずである。スペインでは例外的に湿潤なガリシアの土地は、個性的な酪農文化が胚胎するにふさわしい環境を提供する一方、人々は、溪流から牧草地や飼料作物の畑に水を引くことで、緑豊かな農の空間をつくった。そうした舞台装置と人間の営みの間に存在する通常の関係性のみならず、道の場合には、多くの人が共同利用するインフラとしての性格が付加される。とりわけ巡礼路にあっては、何百 km も続く道が旅人による経験の共有を可能にする強力な仕掛けとして機能する。旅人たちは、同じ巡礼路の景観を目にしながら旅するだけでなく、人と出会い、語り合うという決定的なイベントを通じて、旅の記憶を共にする感覚を得ることだろう。そこでは、自然や人々の生活風景と旅人の営みが一体のイメージをかたちづくっているに違いない。

景観は、身体と環境の相互作用によって像を結ぶ空間的な実在である。また同時に、そうした空間的な実在が多くの人々の集合的行為の結果として立ち現れるという意味で、間主観的な性格を帯びている。とすれば、サンティアゴ巡礼路の景観は、土地利用のまとめ、巡礼を演出する路面デザインや標識、統一感のある町並みといった視覚的な形象としてではなく、むしろ、それらを舞台装置として活動を共にする人々の経験世界として存在する、と考えるのが妥当ではないだ

ろうか。

もちろん、経験世界としての景観というとらえ方は、道の景観のみに妥当する議論ではない。地域空間に共同利用の仕組みが備わっているかぎり、そこには、経験が共有されているがゆえに明確な像を結ぶイメージが存在するはずである。にもかかわらず、本研究がサンティアゴ巡礼路を切り口に選んだことには、相応の根拠がある。サンティアゴ巡礼路は、多くの集落を繋ぐ道であるが、視覚的形象としてこの道をとらえるだけで、後背地をなす地域と異なった特別な何かが見えるわけではない。サンティアゴ巡礼路の景観というのが存在するとすれば、それは、巡礼路の景観を演出するデザインが施されているからではなく、多くの人々の経験を束ね、記憶を共有させる舞台装置がしっかりと働いているからである。舞台装置と人々の営みの間に成立している緊密な関係にこそ、サンティアゴ巡礼路に着目することの積極的な意義があるというのが、本研究から得られた重要な知見である。

今回採用した研究デザインは、今後の研究に対して少なからぬ可能性と課題を提起している。まず、学生のフィールド活動への参加について、本稿では、巡礼路を体験してもらい、得られた結果を調査チームとして共有するという方法をとった。しかし、内容・方法に工夫を施すことで、同様のフィールド活動を景観教育の一環として展開することも可能であろう。他方、学生を被験者に立てるのではなく、実際に巡礼路を歩いている旅人へのインタビューから巡礼路の経験に関する知見を深めることも、今後に向けての課題となる。そのさいには、ある宿場町から景観調査を始め、次の宿場町までの調査を終えてからアルベルゲに投宿する旅人にアプローチするなど、巡礼路の景観に関するインタビュー協力者の語りを適切に解釈するための調査法を編み出す必要がある。最後に、いま一つの課題として、旅人が景観を感受するという側面だけでなく、巡礼者とかれらを支援する地元の事業者・住民の行動が巡礼路の景観を進化させる可能性にも視野を広げたい。道は、数ある景観要素の一つではなく、地域空間を組織し、変化させる交流のインフラであることを忘れるべきでない。

注

- 1) 間主観性 (intersubjectivity / Intersubjektivität) は、現象学の創始者の一人、ドイツの哲学者 E. フッサールが提示した概念である。
- 2) 景観は、サンティアゴ巡礼路を主題化した現地の書物が取

- り上げる主要テーマの一つである。しかし、巡礼路の景観を正面から学術的に論じた文献は必ずしも多くない。地理学的な視点からの研究としては、Armas Diéguez (1996), Sotelo Navalpotro et al. (2016) が示唆に富む。
- 3) ランドスケープの概念については、造園学・計画論の立場から推進されてきたランドスケープエコロジーの議論を参考にしている (武内, 2006)。
 - 4) 参加学生は以下のとおりである。大矢美佳, 絹川ほのか, 土井柚里奈, 西貴司, 森島更, 渡邊理久 (以上, 愛知県立大学), 佐川千遥, 柴山莉絵子, 松下梓 (以上, 金沢大学)。大矢, 絹川, 渡邊の3人は, サンティアゴ大学に2016年秋より1年間留学, それ以外の6人は, VIA LACTEA プロジェクト (サンティアゴ大学, ポルトガルのミニョ大学, 金沢大学, 愛知県立大学の4大学による学術交流プロジェクト) により, 2017年2~4月の期間, サンティアゴ大学で学んだ。
 - 5) 詳細なフィールドワークは, トリアカステラ村に限定して実施したが, II節で取り上げる他の7つの宿場町についても, さまざまな機会に現地視察を行ったことがある。
 - 6) IGNがスペイン地理情報センター (Centro Nacional de Información Geográfica) のデータダウンロードサイト (<http://centrodedescargas.cnig.es>) を通じて提供している。
 - 7) サンティアゴ巡礼路は, 2手に分かれる区間があるため, いずれのルートを取るかによって距離に変化が生じる。
 - 8) ガリシアにおけるユーカリ植林の現状および環境団体による批判については, 主として, ガリシア生態保護協会 (ADEGA) による報告書 (Varela Díaz, 2017) を参照した。
 - 9) サンティアゴ大学を中心としてガリシア=ポルトガル語圏の文化, 社会, アイデンティティに関する分野横断的研究を推進している Grupo Galabra の代表, エリアス・トレス氏 (サンティアゴ大学文学部教授) は, 2017年3月に行った筆者との対話のなかで, ガリシアの景観を大きく変えた要因として, ユーカリの植林と農地の交換分合をあげた。
 - 10) 世界気象機関 (WMO) のデータによると, サンティアゴの年間降水量は, 1981~2010年の平均で1787mmである。
 - 11) スペインでは, 一般に地上階を区別し, 日本でいう2階を1階とよぶが, 本稿では便宜上, 日本式の階数表示を用いている。
 - 12) 移動する人の記憶のなかで構築される景観について, 筆者らは, 名古屋・中川運河の研究をもとに「ボートスケープ」という概念で論じたことがある (清水・竹中, 2016)。
 - 13) この分野の先行する試みとして, カタルーニャ景観院 (Observatori del Paisatge de Catalunya) による教育プロジェクト「都市, 地域, 景観」 (www.catpaisatge.net/educacio), 同プロジェクトをモデルとしてガリシア建築家協会が実施した「プロジェクト大地 (Proxectoterra)」をあげることができる (Colexio Oficial de Arquitectos de Galicia, 2015)。
- Coruña, pp.87-122.
- Cabo, Ángel (1987): “Galicia”. En de Terán, Manuel et al. (eds.): *Geografía regional de España* (quinta edición). Barcelona: Ariel, pp.29-57.
- Colexio Oficial de Arquitectos de Galicia (ed.) (2015): *Pagus: Galicia, un país de paisaxes*. Santiago de Compostela: Colexio Oficial de Arquitectos de Galicia, 96p.
- Lois González, Rubén Camilo y Lopez, Lucrezia (2012): “El Camino de Santiago: una aproximación a su carácter polisémico desde la geografía cultural y el turismo”. *Documents d'Anàlisi Geogràfica*, 58-3, pp.459-479.
- Nogué, Joan (ed.) (2007): *La construcción social del paisaje*. Madrid: Biblioteca Nueva, 343p.
- Piñeira Mantiñán, María José e Santos Solla, Xosé Manuel (eds.) (2011): *Xeografía de Galicia*. Vigo: Xerais, 472p.
- 清水裕二・竹中克行 (2016): 「連続体の美学——時を刻むボートスケープ」竹中克行編著『空間コードから共創する中川運河——「らしさ」のある都市づくり』鹿島出版会, 78~83頁。
- Sotelo Navalporto, José Antonio et al. (2016): “El «camino portugués» de Santiago, paisajes más paisanaje”. En Vera, J. Fernando et al. (eds.): *Paisaje, cultura territorial y vivencia de la Geografía*. Alicante: Publicaciones de la Universidad de Alicante, pp.381-414.
- 竹中克行 (2013): 「サンティアゴ・デ・コンポステラ——交錯する歴史地区の知覚表象」『都市地理学』8, 68-81頁。
- 武内和彦 (2006): 『ランドスケープエコロジー』朝倉書店, 245頁。
- トゥアン, イーファー (1988): 『空間の経験——身体から都市へ』筑摩書房, 360p.
- Varela Díaz, Ramón (2017): “Eucaliptos e o forestal arborado galego 2017” (Resumo do informe e conclusions). Asociación para a Defensa Ecolóxica de Galiza (<http://adega.gal>).
- Xunta de Galicia (2016): *Catálogo das Paisaxes de Galicia. Parte I. Memoria*. Santiago de Compostela: Xunta de Galicia, 155p.

文 献

Armas Diéguez, Pedro (1996): “El camino y sus paisajes”. En Leira López-Vizoso, José (ed.): *O Camiño francés. I Aulas no Camiño (1996, Ferrol)*. A Coruña: Universidade da